

Max Classroom.net

入試問題アプローチ 2018

早稲田大学 文学部・文化構想学部入試

A 入試概況 (1 ページ目は全学部共通)

大学全体の 3 年間の受験者数、合格者数、倍率の変化<一般方式、センター試験利用方式>

2018 年度			2017 年度			2016 年度		
志願者数	合格者数	倍率	志願者数	合格者数	倍率	志願者数	合格者数	倍率
117,209	13,967	8.4	114,983	15,840	7.2	108,039	17,541	6.2

\*注意： この表のみ志願者数に対する倍率。2 ページ目以降は受験者に対する実倍率。

私立大学入学定員管理の厳格化により、過去 2 年間で志願者は 9170 人増えたのに対し、合格者は 3574 人減っている。2016 年度比で実に 20%以上の合格者がいなくなったことになり、倍率も 6.2 から 8.4 と 2 ポイントも上がっている。

学部間併願状況 (早稲田大学入試センターHP より)

政経																			
1,715	法																		
1,285	944	文構																	
186	117	938	4技能																
984	802	5,592	604	文															
123	55	602	760	690	4技能														
1,334	1,436	5,274	586	4,822	483	教育													
3,405	1,949	3,184	322	2,250	203	5,675	商												
55	18	0	0	0	0	479	59	基理											
49	16	0	0	1	0	462	54	-	創理										
60	18	0	0	1	0	527	41	-	-	先理									
2,628	1,960	4,172	458	3,155	323	6,297	7,306	21	27	23	社会学								
425	437	1,420	95	1,121	77	3,440	2,347	180	206	162	2,642	人科							
51	49	158	14	118	6	429	307	10	16	9	329	526	スポ						
335	229	585	361	358	181	517	456	15	15	15	531	152	33	国教					

文学部、文構想学部間の併願はもちろんのこと、教育、商、社会学部との併願が多くみられる。方式別受験者数を見ると、一般受験者のうち文学部は 7%、文化構想学部は 10%弱が同学部内の英語 4 技能方式を併願している。一方、英語 4 技能方式のうち、文学部は 74%、文化構想学部は 71%が一般方式と併願している。文学部、文化構想学部の 4 技能試験同士の併願は 760 人と多く、文学部志望者を母数とすると 81%、文化構想学部を母数とすると 57%となり、併願関係が非常に強いことが分かる。

## 過去3年間 方式別の受験者数、合格者数、倍率

		2018年度入試			2017年度入試			2016年度入試		
		受験者	合格	倍率	受験者	合格	倍率	受験者	合格	倍率
文	個別	8,277	819	<b>10.1</b>	7,720	850	<b>9.1</b>	7,479	1110	<b>6.8</b>
	英語外部	888	192	<b>4.6</b>	350	182	<b>1.9</b>			
	セのみ	880	172	<b>5.1</b>	965	172	<b>5.6</b>	933	198	<b>4.7</b>
	セ併用	878	85	<b>10.3</b>	671	172	<b>3.9</b>	760	173	<b>4.4</b>
文構	個別	9,129	763	<b>12.0</b>	9,835	886	<b>11.1</b>	8,596	1474	<b>5.8</b>
	英語外部	1,279	239	<b>5.4</b>	528	293	<b>1.8</b>			
	セのみ	838	158	<b>5.3</b>	830	124	<b>6.7</b>	873	148	<b>5.9</b>
	セ併用	1,163	217	<b>5.4</b>	895	256	<b>3.5</b>	888	218	<b>4.1</b>

## 過去3年間の合格者のセンター900集計 得点率平均 (Benesse集計)

		2018年度入試	2017年度入試	2016年度入試
文	セのみ	<b>92.1</b>	92.8	92.0
	セ併用	<b>95.1</b>	94.0	90.3
文構	セのみ	<b>92.0</b>	91.6	91.7
	セ併用	<b>92.9</b>	93.0	88.6

## 過去3年間 方式別の合格者平均偏差値

		2018年度入試	2017年度入試	2016年度入試
文	個別	<b>72.0</b>	72.6	70.8
	英語外部	<b>70.8</b>	67.4	
	セのみ	<b>78.4</b>	78.7	78.6
	セ併用	<b>75.6</b>	75.9	72.8
文構	個別	<b>71.0</b>	71.9	69.9
	英語外部	<b>71.6</b>	68.0	
	セのみ	<b>77.7</b>	76.9	78.4
	セ併用	<b>72.1</b>	71.4	71.9

文学部の入試は(学科ごとに見るとバラツキはあるが)全体としてはほとんどの方式で昨年度より倍率が上がっている。ただし、合格者平均偏差値(SS)を見ると、2017年度に50~70名の定員が英語4技能利用型に割り振られた時の影響のほうで文学部、文化構想学部には明らかに大きかったようだ。2018年度は倍率上がれど合格者の偏差値レベルは維持、場合によっては下がっている。特に、センター併用方式の倍率上昇が顕著だが合格者平均偏差値はほぼ同程度と言える。

英語4技能試験方式は初年度の2017年度は早稲田にしてまさかの1倍台の倍率であったが、2018年度は5倍まで上がってきた。偏差値も個別に追いついてきている。センター利用型<センターのみ>は上位受験生の集まるところとなり、合格者偏差値77、78と非常に厳しい戦いになっている。

## B 英語試験の概況

文学部、文化構想学部は出題内容、傾向ともに全く同じ。このレベルで必要とされるアプローチを磨くのに最適な問題であり、また早慶上智の受験者には足がかりになるレベルと言える。実際に受験するかどうかは別としても、また本命大学や学部がどこであれ、難関校志望者には10月～11月に取り組んでほしい問題だ。

全体の問題構成としては長い間変わっていないが、受験生を苦しめていた大問5の英文サマリー問題の形式が2017年から変わり、かなり解きやすくなった（詳細は各問題のアプローチを参照のこと）。

MARCHを含めた多くの私大で1000語を超える問題が散見されるようになった一方、早稲田の文・文化構想は900語を超える長文がない。問題の難易度は早慶としては「標準～やや高い」に入るが、MARCHレベルのものとはやはり一線を画す。細かい部分にこだわらずに、速読と大意を取り、テンポよく問題をこなすことに慣れよう。単語がかなり難しい文章も出てくるため、ターゲットレベル+アルファがしっかり頭に入っていないと厳しい。試験時間90分は十分に余裕のあるもので、時間が足りなくなるということはないだろう。速読を心がける一方で、「難しい」と思った個所には十分に時間を使って読み解くことも必要。下記の時間配分を目標にして過去問演習に取り組みたい。

対策としては、まずターゲットレベルの語彙と熟語力を夏休み終わりまでに完成させ、9～10月以降はその復習+それ以上の単語に取り組んでいくことが必須。また、700～1000語程度の文章に慣れておきたい。全段階として、立教、青山学院の英文に慣れ、「速読」「英語で読む」の基礎をしっかりと身に付けておきたい。細かい時間配分は異なるが、上智、早稲田の社会学部、商学部あたりの過去問も良いトレーニングになるのであわせて取り組みたい。

### 【時間の目安と難易度】

	内容・語数	時間	難度
1	読解： 300語程度×2題	18分	D
2	読解： 200語、300語、550語	25分	C
3	読解： 700～800語	25分	D
4	会話文	7分	B
5	英文サマリーの完成	10分	C

C 出題形式ごとの分析とアプローチ

大問 1

【2018 年 文化構想学部 大問 1】

Read the following two passages and choose the most appropriate word or phrase for each item (1~14). Mark your choices (a~d) on the separate answer sheet.

(A) If someone ( 1 ) here in South Florida, chances are they had fruit trees in their yard or in their neighborhood. Maybe between games of basketball in a friend's narrow alley driveway they walked down the lane to an abandoned lot with a mango tree. Maybe their co-worker ( 2 ) the office every week with bags of softball-sized green avocados or pomelos. Maybe they remember how every night at sunset, escaped cockatoos would pick at a neighbor's papaya tree. Maybe they only learned to love lychees once they left home for another city and, spotting the fruit in a grocery in Chinatown, bought them ( 3 ), only because they knew that same fruit was hanging in the yard opposite their childhood home.

Without taking a single class, they knew how to spot that fruit. They knew what it was, its other names, when it was in ( 4 ), and what it looked like not only in a cardboard box in the grocery, but clustered heavy between the tree's feathery leaves. That is one of a ( 5 ) versions of Miami, one of their perspectives.

We all experience the places where we live in so many ways, and these ways change with the times of year, with our goals, our families, and our lives. Learn a piece of ( 6 ) history; know who designed a building; be able to identify a bird or a graffiti tag, and suddenly, you live in a different place, and that place will travel with you. Spot ripe Spanish limes as a child, and you'll still spot them today. A layer of the finite has been laid ( 7 ) the infinite. It has always been there, but it was almost a blank space, something you didn't even think about.

(Adapted from Tiffany Noé and George Echevarria, *Forager: A Subjective Guide to Miami's Edible Plants.*)

- |    |               |                 |                 |                 |
|----|---------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 1. | (a) came down | (b) grew up     | (c) took place  | (d) went over   |
| 2. | (a) bombarded | (b) enveloped   | (c) pitched     | (d) ventilated  |
| 3. | (a) furtively | (b) impulsively | (c) obsessively | (d) regretfully |
| 4. | (a) place     | (b) season      | (c) time        | (d) turn        |
| 5. | (a) dreamer's | (b) native's    | (c) teacher's   | (d) traveler's  |
| 6. | (a) colonial  | (b) global      | (c) local       | (d) natural     |
| 7. | (a) across    | (b) behind      | (c) beyond      | (d) unto        |

### 【形式】

300 語程度の長文の空所補充が 2 題出される。1 つの長文に付き、7 つの空欄があり、それぞれ 4 つの選択肢から選ぶ問題。

### 【分析】

この空所補充問題がかなり難しい。個々の配点は大きくないものの、出来る人と出来ない人が分かれる問題になろう。単語帳レベルを超える慣れない熟語や表現が含まれる問題もあり、なかなか選択肢を 1 つに絞れないものもある。また、文脈の判断が微妙かつ難易度の高いものもあり、文章理解がしっかりできていないと、「何を言っているのか分からず、どの選択肢がふさわしいのかも判断が付かない」ということになってしまう。大意を把握することはもちろんだが、細かい部分も正確に把握できないと空所を補充できない。中には選択肢のわずかなニュアンスの違いを考えながら答えなくてはいけない設問もいくつか入っており、難易度が高い。答えが即決できる問題は少なく、本文の前後関係を読みながら、まずは選択肢を 2 つに絞る。そこからは、はっきりとした根拠がないながらも「これだと思う」というなんとなくの文脈理解と感覚で答えを決めていかなくてはならないようなものも多い。14 問中 10 問正解を目標とし、最低でも 8~9 問は確保したい。なお、上智の問題などと共通する部分が多く、練習問題としてうまく使えるだろう。

### 【アプローチ】

細かい文脈を把握するために、最低でもパラグラフごとの意味を取ることが大切になる。パラグラフ単位で意味を取り、解き進めていこう。つまり、最初のパラグラフを **First Reading** して、そのあと、そのパラグラフにある、空欄( 1 )、( 2 ) ( 3 ) の前後に再度注意しながら、答えを選ぶということ。選択の決め手として、前後の 2 行に関連語や反意語、原因・結果などを表す語が含まれていることが多いので、選択肢と前後の行の単語のニュアンスも合わせて確認していこう。難しい選択肢は、無駄に時間を使わず、思い切って選ぶしかない。熟語は、前置詞などにも注意して選びたいが、いつも聞くものと異なる表現は、勘ぐらずに素直に選択肢から外し、オーソドックスな答えを選べばよい。

時間配分は簡単なものであれば 1 題につき 8 分程度としておこう。易しめの問題は 6~7 分、難しい問題は 10 分かけても良い。選択肢を選ぶ前に、本文の内容理解に時間がかかり、じっくり読まなければいけない問題も出てくるので、速読はあまり心がけずに解いてよい。

### 【MAX 感想】

私が苦手とする問題である。本文の細かい文脈を理解することも難易度が高いが、選択肢の微妙なニュアンスの判断を迫られるケースもいくつかあり、正直苦勞する設問がある。ちなみに、例年、2 つある問題のうち、片方は難易度が高く、もう片方は標準レベルに設定されている気がする（気のせいかもしれないが）。例題の(2)にある **bombarded**、**ventilated** などは受験生が知っているレベルではなく、これは捨て問題としてとらえるしかない。時間は 2 題合計 11 分で終わる年もあったが、相場は 13 分ぐらいだろうか。難しい問題は 15 分かかった年もある。各長文とも **First Reading** は 2 分半ぐらいで 5 分ぐらいかけて読み直ししながら、選択肢を絞っている。

大問 2

【2018年 文化構想学部 大問 2】

Read the following three passages and mark the most appropriate choice (a~d) for each item (15~24) on the separate answer sheet.

(A) Autobiographical memory is notoriously unstable. Although people typically remember well the gist of an important life event as time passes, they often misremember the details. Factual errors in autobiographical recollection increase substantially as the temporal distance from the to-be-remembered event increases. For example, research indicates that accuracy in recollections of how people heard the news of the September 11, 2001 terrorist attacks in New York City decreased substantially over an 8-month period. Research on personal recollections of dramatic historical events suggests that despite people's beliefs to the contrary, accuracy for memories of the John F. Kennedy assassination or the 9/11 attacks may be no greater than for memories of any other events in life.

The temporal instability of autobiographical memory, therefore, contributes to change in the life story over time. But many other processes are also at play, and many of these reflect changes in how the person comes to terms with the social world. Most obviously, people accumulate new experiences over time, some of which may prove to be so important as to make their way into narrative identity. Furthermore, as people's motivations, goals, personal concerns, and social positions change, their memories of important events in their lives and the meanings they attribute to those events may also change.

(Adapted from Dan P. McAdams, "Personal Narratives and the Life Story.")

15. According to the passage, what do we know about people's memories of major historical events?

- (a) The accuracy of recollections tends to increase in proportion to the historical importance of the event.
- (b) As time passes people are usually able to recall major events in both great detail and accuracy.
- (c) People's memories of major events are far more stable than their memories of everyday occurrences.
- (d) There is no evidence to suggest that people remember major historical events any more accurately than they remember other things.

**【形式】**

長文を読み、内容判断を行う。長文は、およそ 200 語、300 語、500 語程度と 3 つ出され、それぞれ 2 題、3 題、5 題の設問がある。

**【分析】**

大意を問う問題が多く、細かいところにとらわれずに速読をしていく力が必要。文章のレベルは標準～やや難レベル。早稲田のレベルになると本文の言い方のままで選択肢が並ぶことはなく、多くが書き換えられている。抽象的な選択肢を本文の言葉とすり合わせながら、絞っていく必要があり、その点からも難易度が高い。早稲田の文、文化構想の問題では、この大問を落としてはならない。10 問中 8 問を目標とし、最低でも 7 問を確保することが必須。ここで落としたりは厳しい。

**【解き方】**

まず「100 語につき、1 つ答えを探せばよい」ということを意識しよう。残りの部分は直接解答には関係ないところも多く、「すべてを理解しなくては」という几帳面なリーディングマインドを捨てて、速読&大意の把握に集中する。いかにメリハリをつけて読めるかが大切。そのために、最初に必ず設問文に目を通し、キーワードにマークをし、「この答えを探すのだ」とあらかじめリーディングの目標を立てる。とりあえず、**First Reading** では、大意の把握に努め、「ここは答えに関係ないな」と思ったところは、例え内容があやふやでも飛ばして読んでしまおう。その次に、再度、選択肢を見ながら、該当箇所を **Second Reading** で確認していけばよい (**Second Reading** で見直す箇所も見つけやすい)。

時間配分は設問数に 2 を掛けた数字を意識しよう。つまり、A は 4 分、B は 6 分、C は 10 分となる。そのためにも本文は WPM100 で読み (200 語なら 2 分後、300 語なら 3 分後、500 語には 5 分後に解き始めるという時間配分)、各設問は 1 分で解くペースになる。(20 分で終わるのが理想だが) 合計 25 分までかけても良いので、これらの時間に各 1~2 分とって大丈夫という気持ちで解いてみよう。

	語数、設問数	First Reading	Second Reading	合計
A	200 語、2 問	2 分	2 分	4~5 分
B	300 語、3 問	3 分	3 分 + $\alpha$	6~8 分
C	500 語、5 問	5 分	5 分 + $\alpha$	10~12 分

**【MAX 感想】**

やはり選択肢が難しく、本文とすり合わせて答えを絞っていくのが難しいものもあった。時間配分を守りながら、正答率を落とさないようにするには、**First Reading** は概要の把握とキーワードの発見に努めることが最重要。中には易しい問題もあり、「こんな簡単な解答でいいの？ひっかけ？、、、(読み直した結果) いや、やっぱこれだよな」というものがあり、結果的にもやっぱりそれが解答だった、というものもある。素直に読んで、素直に解く、という速読&大意把握が基本だと言える。所要時間 15 分。

大問 3

【2018年 文化構想学部】

Choose the most appropriate sentence from the following list (a~h) for each item (25~31).  
Mark your choices on the separate answer sheet.

- (a) European movement in Africa and parts of South East Asia had previously been inhibited by the presence of malaria, a deadly disease transmitted by mosquitoes, for which there was no known cure or means of prevention.
- (b) However, the impact of Perkin's mauveine dye on the world was perhaps just as intense as more obviously socially useful inventions.
- (c) Indeed, it was such experiments with coal tar, and in the same period with rock oil, that established modern materials and products in a vast number of areas.
- (d) In the Roman republic and the empire which followed it, there had been a law that only members of the hereditary upper class, the "patricians", were permitted to wear clothes with purple dye.
- (e) The new synthetic products were briefly popular, but after a while people went back to using natural, organic products.
- (f) People living near Perkin's factory noticed how the colour of the waters of the canal would change periodically, as different chemical compounds were synthesised.
- (g) The problem with vegetative dyes was that they quickly faded and lost colour, and even when new were not particularly bright.
- (h) With the inquisitiveness and insight that great inventors have, he took this by-product and looked for ways to use it.

In 1856, William Perkin, an 18-year-old chemist working in London, made an accidental discovery that changed the world. Perkin was working in his home laboratory, experimenting on coal tar residue while trying to find a synthetic equivalent of quinine. Coal tar was the product used for lamplight in many 19th-century homes, and its residue, made up of complex carbon-based compounds, was proving a valuable source of material for the petrochemical synthetics that were just beginning to be discovered by chemists. ( 25 ) All the various plastic materials, solvents and cleaning materials such as soap, medicines, pesticides, fertilizers, explosives, and many more products that we use today come from such hydro-carbon syntheses.

Quinine, the natural product which Perkin was attempting to reproduce synthetically, was an immensely important product in allowing for the spread of imperialism, colonialism and world trade in the 19th century. ( 26 ) Quinine, made from the bark of a South American tree, was the only known prophylactic, but it was in short supply and expensive; thus, a race was on for chemists throughout the world to come up with a synthetic alternative, though it was not until 1934 that an artificial medicine against malaria was developed. <以下略>



### 【形式】

700～800 語程度の長文。文中に 7 つの空所があり、8 つの選択肢から答えを選ぶ。選択肢は全てセンテンス。

### 【分析】

この問題の難しいところは、空所のせいで、文脈が捉えづらいということである（文が抜け落ちている段階で、前後関係を見極めるのは難しい）。また本文のレベルも高く、かなり苦手とする人もいないだろうか。

7 問中 4 問の正解を合格ラインとして捉えよう。もちろん 5 問以上正解できれば良いのだが、問題の性質上、1 問だけ間違えるという確率は低い（要は、1 つ間違えていたら、その間違えた選択肢がもともと入るべき個所も間違っている可能性が高いため）。この問題では時間を長めに使ってよいだろう 25 分を 1 つのめどとしたい。また以下のアプローチを忠実に使うと確実に解きやすくなるので、過去問で練習をしよう。

### 【アプローチ】

この問題は空所ごとにどの選択肢が入るのかと考えていたら解けないし、時間の浪費が激しい。また選択肢がセンテンスであり、また数も 8 つと多いことから、それらに最初に目を通すことは混乱を招く。

この問題のアプローチポイントは以下の 3 点である

- |                                                                                                                                                                                          |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1 <b>First Reading</b> で概要を理解するとともに、パラグラフごとの大意や話の転換を整理して、本文を大きなパートに振り分ける。</li><li>2 選択肢をパートに割り振る。</li><li>3 文脈や空所前後のキーワードを突き合わせて、選択肢を選ぶ。</li></ol> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

次のページで、実際に 2018 年度の文化構想学部の問題を見てみよう。

＜作業1＞ 本文を大きなパートに振り分ける

パラグラフの概要を読み取っていけば、大体以下のように大きく分けてA～Cという3つのパート、さらに分けるとA1～C2という6つのパートに分けられる。細かく分けていくことが主眼ではなく、サブテーマまで分ける必要はないが、できる範囲で分けておくとよい。

	テーマ	サブテーマ	パート	空所
パラグラフ 1	新しい染料の発見前	William coal tar 副産物の実験	A1	25
パラグラフ 2		Quine の開発	A2	26
パラグラフ 3	新しい染料を発見する	新しい染料の発見	B1	27
パラグラフ 4		それまでの染料	B2	28, 29
パラグラフ 5	パーキンの染料とビジネスと発展	会社の設立と染料の発展	C1	30
パラグラフ 6		新染料の効果と貢献	C2	31



＜作業2＞ 選択肢をパートに割り振る

次に、選択肢(a)～(h)をキーワードと先ほど振り分けたテーマ、サブテーマをすり合わせながら、なんとなくでよいのでパートに振り分けていく。「この選択肢は後半部分だな」「この選択肢は真ん中のあたりかな」と大体の場所に割り振ることができる。以下は私が解いたときに実際に割り振ったものである。細かく割り振る必要もなく、B1、B2の区別がつかないものはBとしておけばよいし、2つ可能性があればB2/Cのように併記してよい。今回は(a)の選択肢が本文と関連性を感じず、最初に読んだ時には判断がつかず?とした。そういうのもあってよい。これにより、8分の1という解答確率から、3分の1ぐらいの解答確率にまで引き上げることができる。また、例えばBのパートには3つの空欄があるのにBに振り分けられた選択肢が2つしかない、といったように空所の数と選択肢の数が一致していない場合は振り分けが上手くできていないわけで、解答の際に調整をしやすくなる。

選択肢	Key Words/Phrases	予想されるパート
(a)		?
(b)	Perkin's mauveine dye	C
(c)	it was such experiments with coal tar	A1
(d)	In the Roman republic / to wear clothes with purple dye	B2 / C
(e)	The new synthetic products / using natural, organic products	C1
(f)	People living near Perkin's factory	C1
(g)	vegetative dyes	B
(h)	he took this by-product and looked for ways to use it	B



＜作業3＞ 文脈や空所前後のキーワードを突き合わせて、選択肢を選ぶ。

あとは文脈や空所前後のキーワード、選択肢の文をより詳細に確認し、答えを選んでいく。作業2の振

り分けが必ずしも正しいとは限らない。文脈判断の基本として、もちろん文の内容で判断するのが大前提であるが、接続詞、代名詞、冠詞、名詞の単複、時制といった文法的な要素も含めて、**Second Reading**で解答を絞っていききたい。

**【MAX 感想】**

過去問の中には非常に難しい問題もあり、受験生は相当苦しめられているはずである。**First Reading**で大意をとることはできても、いざ選択肢を選ぶ段階になると、前後の文とのつながりがすんなり見えないものも多く、絞りきれないものが多かったのではないだろうか。私も以前は苦しめられた問題だが、このアプローチをとり始めてから解く時間も短くなったし、なによりも効率的かつ正確に解答を出せるようになった。ちなみに、この大問Ⅲは合否を分ける1つの個所になるのではないかと、感じた。

所要時間 18 分。

大問 4

【2018年 文化構想学部】

Choose the most appropriate phrase from the list (a~m) for each item (32~38). Mark your choices on the separate answer sheet.

*Two friends, Miles and Sophie, are talking.*

*Miles :* Are you okay, Sophie? We've ( 32 ) a word out of you all afternoon.

*Sophie :* Sure, Miles. It's this term paper I'm ( 33 ) on: "Jeans and the development of modern society." It's so interesting. I can't get ( 34 ) this kind of thing.

*Miles :* You can't ( 35 )... can you?

*Sophie :* No, I ( 36 ). Did you know that the origin of the word 'jeans' relates to Genoa, a port in Italy, but the word 'denim' comes from the French 'de Nîmes', a town in France?

*Miles :* Hang on ( 37 ), I thought that jeans were the all-American clothing.

*Sophie :* Sure, in many ways they are, but they also tell us something about what it means to be 'all-American'.

*Miles :* If you ( 38 )... You read about them and I'll just wear them.

- |                      |                 |                  |
|----------------------|-----------------|------------------|
| (a) already listened | (b) believe you | (c) belongs to   |
| (d) be serious       | (e) enough of   | (f) hardly heard |
| (g) mean it          | (h) a moment    | (i) reading up   |
| (j) say so           | (k) to this     | (l) too much     |
| (m) writing down     |                 |                  |

### 【形式】

200 語程度の会話文において、7 つの空欄を 13 の選択肢から埋める。

### 【分析・アプローチ・MAX 感想】

会話の中身は難しくなく、選択肢も全体としては平易なものである。熟語表現、会話表現については、一部慣れないものも含まれる。まずはターゲットレベルの熟語を最低限抑えておけば、歯が立たないということはない。2018 年度は文学部は易しかった一方、文化構想学部は口語的な言い回しが問われるものでやや難易度の高い出題であった。7 問中でできれば 5 問をおさえたい。

アプローチとしては、まずは会話を全て読み、大意を掴む。選択肢が多く、雑多なため、**First Reading** で 1 つ 1 つ空所を埋めながら読むことは避ける。その後、内容にあった選択肢を入れていくのだが、品詞はもちろんのこと、単数複数的一致、目的語の有無など文法的なアプローチが大きなヘルプとなる。

会話問題については、想像力豊かに深く考えると、「これも言えそう、あれも言えそう」と選択肢の幅が必要以上に広がってしまうが、まずは自分の知っている表現をしっかりと埋めていき、「これは違うな」というものを確実に消去していくことができるようにすること。

私が解いてみた感覚では、①内容的に選択肢を 4 つに絞り、②文法面でさらに 2 つに絞り、③最後に内容をもう一度見て 1 つに絞る、といった感覚だっただろうか。ほとんどの選択肢は②のステップまでに 2 つには絞れるので、あとはその 2 つを比べてどちらがベターか、どちらがより馴染みのある言い方か、と考える。文法的なアプローチがとれば、13 択の問題が、事実上 2 択、3 択へと形を変えてくれる。そのようなマインドを進めれば、気も楽に進めていけるのでは、、、と自分に言い聞かせる。所要時間 4 分。

## 大問 5

## 【2018年 文化構想部】

Read the following passage and complete the English summary in your own words in the space provided on the separate answer sheet. The beginning of the summary is provided; you must complete it in 4–10 words.

It is almost impossible to find a society without some process of education. Historically there have been a variety of aims pursued such as completion of personal character, cultivation of intelligence, or simply job preparation; however, as the American philosopher John Dewey put it, ‘the purpose of education has been, in essence, the same – to give the young the things they need in order to develop in an orderly, sequential way into members of society.’ Socialization has been arguably one of the most common functions, regardless of time or place, that schools or teachers are expected to fulfill. People without children, for example, usually aren’t opposed to the government spending their taxes on education, partly because they believe this contributes to the welfare of society through creating responsible members and ‘good neighbors’. What counts here is what a ‘responsible’ member of a society means. If socialization simply means to make children well-behaved and obedient to society by instilling in them existing norms, education could in an extreme case be complicit in perpetuating corruption or tyranny. In fact, this has seldom been the case, and education can have the opposite effect. What James Baldwin, an American writer, called ‘the paradox of education’ occurs, that ‘as one begins to become conscious one begins to examine the society in which he is being educated.’ By its failure to complete their socialization, education can raise children to become members of society who are responsible not only for the present but also for the future.

## SUMMARY :

Education has historically aimed at making people conform to society, but it also ...

*[complete the summary on the separate answer sheet]*

### 【形式】

150～200 語程度の英文を読み、与えられた文に 4～10 語を加えてサマリーを完成させる。

### 【分析・アプローチ】

2017 年から形式が変更された。2016 年度まではサマリーを全て自分で考えて書くというものであり、非常に難易度の高いものであった。この問題には数々の早稲田受験生が苦しんできたが、おそらく出来が悪かったため、4～10 語を加えて書くもの変わったのだろう。それまでは 1 文という制約のもとのようなサマリーを書くかがとても難しく、またライティング力も相当高いものが要う休されていたが、この変更で相当難易度が下がった。

英文自体は標準レベルのもの。あくまでもサマリーなので、メインアイデアが分かり、全体の話の流れが分かればとりあえずはよしとしよう。筆者の主張がどこにあるのか大意を取る力が必要。本来なら文を読んで、主旨をつかめるようにしたいが、2017 年度以降の形式であれば、最初にサマリー文を読んで、読み取るべき内容をあらかじめ頭に入れておくとよい。

例

Education has historically aimed at making people conform to society, but it also ...



- ・「社会に適応する人を育てるという教育の歴史的な目的」に関する部分はさらっと読めばよい
- ・「それ以外にどのような目的があるのか」という掘むべきのポイントがわかる。

英語を書くという面では、4～10 語という中ですべてを表現していかななくてはならず、単語や表現のチョイスが一番問われるところである。短い文で表すには、本文の主旨のニュアンスを一番正しく伝えられる語をしっかりと選んでいきたい。なお、決して難しい文法を使う必要はないが「in your own words」とあるように、本文の言葉をコピーせず、言い換えをしながら文をまとめる力が必要。

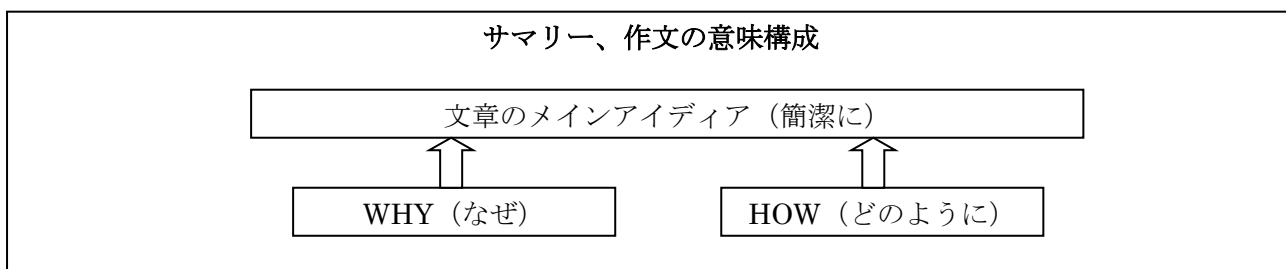
### 【アプローチ： 2016 年度までのもの（参考として）】

この問題については、やみくもに書いても良いサマリーは出来ない。以下のやり方を頭に入れて、過去問演習で感覚を磨いていくことが必須。

最初に、この問題は、「本文のメインアイデアを見つけ、それに対する Why、How に当たる部分を含めて英文を書きなさい。なお、3 つの情報を 1 つの文にうまくまとめて書くこと」という趣旨だということを入りよう。

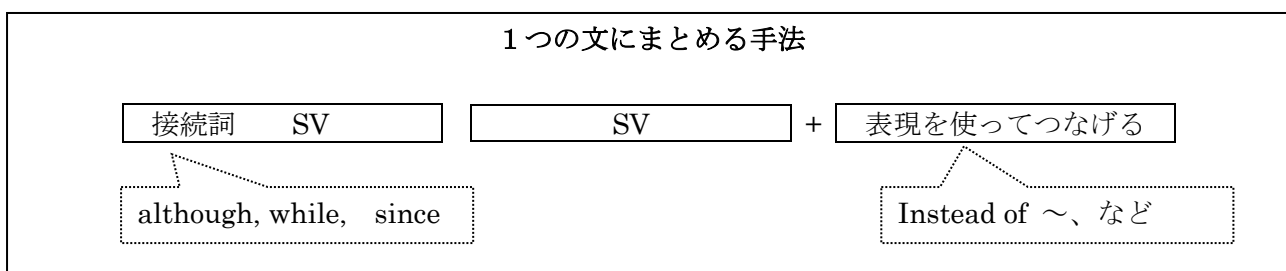
具体的な方法として、まず「何をまとめるのか」という内容面であるが、①本文のメインアイデア、②それに対する Why、How に当たる部分、という 2 段階で構成していく。メインアイデアについては、文章のタイトルを考えるという手法がよい（もちろん映画のようなカッコいいタイトルというわけではなく、メインアイデアを包括する簡潔なもの）。文にしてしまうと、だらだら長くなり、何が大切な

情報なのかが結局分からなくなってしまうという罠に落ち入ることがあるからだ。一番大切な情報はどんなに短い言葉の中でも残っていなくてはならず、逆に言えば、タイトルレベルの長さでも残るべき情報こそがメインアイデアの中核だと言うことだ。いわば、タイトルは無駄な情報をそぎ落とし、重要な情報を見極めるための手法だと言える。次に、5W1H であるが、What、Who は要はトピックであり、すでにタイトルの中に出ているはずである。加えて、Where、When は通常そこまで重要ではない情報である。一方で、Why、How は概して重要な情報を含んでおり、それらを加えて文章を作っていく。



次に、1つの文でまとめる方法であるが、まずそのサマリーに含むべき情報の数を基本的に3つとする。その3つの情報を1つの文でまとめるには、and を何回も使えば可能ではあるが、当然それでは稚拙な文になってしまう。接続詞をうまく使い、3つの情報をつなげていかななくてはならない。具体的には以下の手法を使って、工夫することが効果的である。

- ① 接続詞を使って、2つの文を1つにする
- ② instead of ~ing、in order to do、in spite of ~、due to the arrival of A、などを使って3つの目の情報をつなげる（場合によっては、関係詞などでも可）



仕上げとして、①主題、主張がはっきり伝わるか、②why、how にあたる部分が説明できているか、という内容面と文法面をチェックしたい。加えて、「In your own words」になっているかを確認すること。

何回か練習を重ねるうちに書き方のイメージが分かってくるはず。週に1回ぐらいのペースで数年分過去問演習をしてみよう。また模範解答を見るときにも、上記のような視点で確認していくことが効果的。また、3つ目の情報をつなげる表現のパターンを増やしていくことも大切。最低、逆説、比較対照、理由、原因と結果、条件といったような基本の表現は使えるようにしておきたい。